

平成20年度 沖縄県かりゆし長寿大学校卒業式

去る1月14日(水)県総合福祉センターゆいほーるにおいて、平成20年度沖縄県かりゆし長寿大学校(第18期生)の卒業式が行われました。

いきいきクラス87名、ふれあいクラス81名、計168名の卒業生が大学の思い出を胸にこの日を迎えました。卒業生の皆さんは晴れ着に身を包み、厳かな中にも、晴れやかな卒業式となりました。

式では、新垣学長より「かりゆし長寿大学の誇りと絆を胸に、各地域で積極的に活躍いただくことを願っています。」と卒業生を激励しました。また卒業生を代表して、ふれあいクラスの知花昌雄さんから「卒業後は同



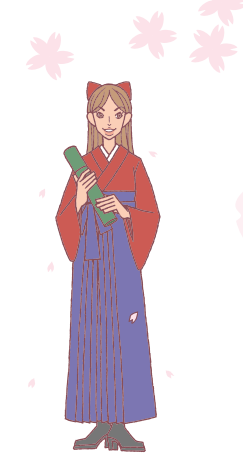
▲新垣学長より卒業証書が手渡された。



▲卒業式後の謝恩会の様子

期生同士のネットワークを深めつつ、先輩同窓会との交流やボランティア活動、出身地域のリーダーとしての活動など、積極的に活躍していきましよう。」と答辞を述べられました。

式典終了後、卒業生は家族や友人に囲まれ祝福の花束を受けたり、仲間と記念撮影をするなどして互いの門出を祝い合いながら別れを惜しみつつ、通い慣れた学び舎を後にしました。



第35回沖縄県保育研究大会開催 日程／平成21年1月31日～2月1日 会場／沖縄コンベンションセンター 他7会場

「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現を目指して」の大会テーマのもと、地域子育て支援施設としての保育所機能の充実強化などを目的に、第35回沖縄県保育研究大会(主催 沖縄県社協・沖縄県保育協議会)が、県内保育関係者一七〇〇名余りの参加者を得て開催されました。

1日目の全体会(式典・行政説明・講演では、行政説明において、沖縄県福祉保健部 青少年・児童家庭課新垣郁男課長より、新たな保育需要などへの対応を目的とした安心こども基金(仮称)の概要について説明がありました。



▲笹尾勝部長
社部笹尾勝部長より、「今後の保育制度と保育所・保育士の役割」と題し、保育所の状況と課題や構造改革と社会保障・保育改革の動き、全国組織の活



▲分科会の様子

動内容などについて講演を賜り、保育界がこれまでにない変革期を迎えていることを参加者全員で認識しました。

新たな次世代育成支援の枠組みを構築するため、国においては少子化対策特別部会を中心に今後の保育制度のあり方が議論されています。また、地方分権改革推進会議では、保育所整備や職員配置の基準設定に対し、市町村移譲を求める声が上がっています。このような流れを受け、市場原理導入への反対の意を示し、子どもの育ちを主体とした保育制度を堅持し、国の責任による基盤整備の拡充にむけ、保育所が一体となり、社会に働きかけていくことが大会宣言で採択されました。

2日目は、保育所の課題別に7つの分科会に分かれ、研究発表と保育実践のあり方について、活発な研究討議が行われました。

地域や子どもの育ちを考える 心豊かな高齢者の力を子ども達へ 高年齢者のためのボランティア講演会開催

去る1月22日、那覇市のバレット市民劇場にて高年齢者のためのボランティア講演会が開催されました。

この講演会は、高年齢者が長年培ってきた豊かな知識や経験を生かしたシルバーボランティアなどの地域活動の担い手を育成することを目的に開かれたもので、厚生労働省の柳澤邦夫児童健全育成専門官を招き、「地域や子どもの育ちを考える」心豊かな高年齢者の力を子どもたちへ」と題し、講演いただきました。



▲講師の柳澤邦夫児童健全育成専門官

柳澤専門官は最初に、近年急増している少年事件について触れ、ゲームやアニメなどの影響による残虐な事件が増えているとして、その原因が子ども達を取り巻く環境の変化にあることを解説しました。続いて、子ども達が犯罪の被害者になるケースを挙げ、



▲講演会の様子

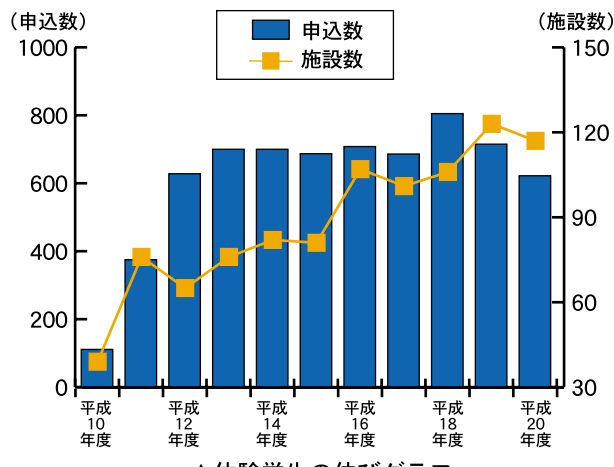
子ども達を守るために地域で活動している全国各地の高年齢者ボランティアの取り組み事例をビデオやスライドを使って紹介しました。

また、登下校時の子どもの安全の見守りや、学校での授業のサポートなど、高年齢者が積極的に子ども達と接することで、自分自身の生きがいや健康づくりに繋がる事を強調され、高年齢者が今まで培ってきた経験などを、地域の子どもの豊かな育ちを支える活動に役立てることが必要だと呼びかけました。

約6千人の「介護等体験」

小中学校教員免許取得を目指す方のための「介護等体験」が、今年度で10年を経過しました。これまで県内では約6千人以上の大学生が社会福祉施設等で体験を行いました。

沖縄県社協では、学生のより良い体験を支援するため、介護等体験を希望する学生と、受け入れ先となる社会福祉施設等とのコーディネートを行っています。この事業が始まって以来、介護等体験に対する理解も少しずつ理解も深まり、事業開始当初は、大学生を受け入れる施設はわずか39施設であったものが、現在では100以上の施設が受け入れに協力しています。



▲体験学生の伸びグラフ

・本人の得意分野(大学での専攻科目)等をうまく取り入れたり、体験後に施設の行事へのボランティア参加もあり、大変嬉しく感じました。

・教育に携わる実習生皆様にとっては、5日間と短い期間ではありますが、障害者との関わりを通して、学生一人一人の資質の向上に繋がる機会になったと思います。

・大学によっては学生の意識に相違があり、職員が戸惑うことがあった。

・まじめさが全面に出ていた分、硬い感じがした。日頃からこのような体験を身に付けていたほうがいいのではないだろうか。勉強ももちろん重要だが、実際に教員になってからは経験の数が多いだけ、対応のよい教師になれると思います。

▲平成20年度受け入れ施設へのアンケート結果から

初めて社会福祉施設と関わる学生には戸惑い等もありますが、これまで多くの学生を受け入れてきた施設からは、教員という社会的責任の重い仕事を目指す学生の資質向上に少しもつなげればと、大きな期待を寄せる声も多く寄せられています。